西藏文献の史料的價値（下）

——吐蕃王統論を中心として——

佐藤長

三

次に王統と年代とについて支那史料と第十章とを比較し、その一致と乖離の諸原因を探求して行きたいと思ふ。

一、支那史料

(一)永徽元年（庚戌）……棄宗弄讚死し孫立つ（新舊唐書吐蕃傳上（以下新舊傳上と略）冊府元龜外臣部九六六・九七四（以下冊府と略））

(二)儀鳳四年（己卯）……贊普卒し其の子器弩悉弄嗣ぐ（新舊傳上）

（＝調露元年己卯）……同右（資治通鑑元年二月壬戌の條）

(三)長安三年（發卯）……器弩悉弄卒し棄隷蹜贊立つ（通鑑三年末條）

神龍元年（乙巳）……同左（冊府九六六）吐蕃の使者來りて喪を告ぐ。中宗之が爲に擧哀廢朝一日す（舊傳上）。吐蕃大首領贊普卒し帝之が爲に擧哀廢朝一日す（冊府九七四）

(四)天寶十四載（乙未）……乞黎蘇籠獵贊死し婆悉籠獵贊立つ（舊傳上・通鑑同年末の條）乞黎蘇籠獵贊死し子娑（挲）（新傳上）（冊府九六六・新傳上）悉籠獵贊立つ

(五)大曆十四年（己未）……韋倫が使して面謁した贊普は乞立贊であつた（新舊傳下）

建中元年（庚申）

(六)貞元十三年（丁丑）……贊普死し其子足之煎立つ（通鑑十三年夏四月の條）婆悉籠獵贊卒し長子立つ。一才にして卒す（冊府九六六）贊普十三年四月を以て卒す。長子立ち一歳にして卒す。次子嗣いで立つ（舊傳下貞元二十年の條）

(七)貞元二十年（甲申）……贊普死す（新舊傳下・冊府九六六）贊普死し其の弟立つ（通鑑二十年春正月の條）

(八)元和十二年（丁酉）……贊普卒するを以て來告す（舊傳下・冊府九六六・九七六・贊普死し可黎可足立つ（新傳下）九七九）

(九)開成三年（戊午）……彝泰贊普死し弟達磨立つ（通鑑三年の條）

（年月不明）……贊普死し弟達磨立つ（新舊傳下）

(十)會昌二年（壬戌）……（達磨）贊普卒す（新舊傳下・冊府九六六・九八〇）

二、テプテルゴンポ　テキストには年代は皆西藏式の干支のみが記されてあるが便宜上支那の干支と年號とを揭出した。

(一)永徽元年（庚戌）……ソンツェンガンポ srong btsan sgam po 死し、子グンソングンツェン gung srong gung btsan 早逝せるによりマンソンマンツェン mang srong mang btsan 立つ

(二)儀鳳四年（乙卯）……マンソン死しドソンマンポルジェ ādus srong mang po rje 立つ。

(三)神龍元年（乙巳）……ドソン死しチデツクテン khri lde btsug brtan 立つ。

(四)天寶十四載（乙未）……チデツクテン死しチソンデツテン khri srong lde btsan 立つ。

(五)建中元年（庚申）……チソンデツエン死しムネツエンポ mu ne btsan po 立つ。

(六)貞元十三年（丁丑）……ムネツエンポ死しヅツエツエンポ dsu tse btsan po 立つ。

(七)貞元二十年（甲申）……ヅツエツエンポ死しチデソンツエン khri lde srong btsan 立つ。

(八)元和九年（甲午）……チデソンツエン死しカリカチュ kha li kha chu 立つ。

(九)開成元年（丙辰）……カリカチュ死し末弟タム tha mu 立つ。

開成四年（己未）……ランダルマ glang dar ma 王立ちて第四年目なり。

以下兩者の記錄を便宜上支那史料を中心として檢討して行から。

(一)西藏史上有名なソンツェンガンポが支那記錄の棄宗弄讚である事は言ふまでもない。しかし此の兩者の名稱は全く一致しない。プトン佛教史にはチデンソンツェン khri lde srong btsan なる王名を出し、

（彼は）その時西藏の人民の王を無視する言を聞きて、十

德の戒法を採り、西藏の人民を佛法に歸せしめたれば、名をソンツエンガンポと稱せらる。[24]

とある。ソンツエンガンポと云ふ名稱の說明は西藏では後の記錄には大體此の解釋を踏襲して居り、[25]それがいはゞ稱號であつて本來の名でない事は明かである。それにしてもプトンの云ふチデソンツエンでは棄宗弄讚に一致せず、解決を別の史料に求めねばならないが、玆にかの有名な唐蕃會盟碑を參照しよう。

第一代支那君主李の王位に卽きて後大唐の國二十三年過ぎゆき（し時）、一つの王統のもとにせん爲化現せる神贊普チソンツエン khri srong brtsan と支那君主太宗文武神皇帝二者は國家を一（の如く）なさん事を語らひて貞觀の年に文成公主を贊普の宮居に迎へたり（E. 1. 21—25）

之によりて棄宗弄讚 k'ji-tsung-lung-tsân が khri sron brtsan である事は決定的であつて、別名「棄蘇農」k'ji-suo-nuong 新傳下 も khri srong の音譯に相違ない。かくして兩史料の矛盾の一つは先づ唐蕃會盟碑によつて解決せられた。

㈡器弩悉弄 k'ji-*tuo-siet-lung はドソンと比較して khri adus srong である事ラウファーの比定せる如くである。[26]マンポルジエ亦支那史料に人名として屢々現れる「莽布支」である。テプゴンの彼の父王及び祖父のマンソンマンツエン、グンソングンツエン共にプトンに一致する。

㈢器弩悉弄の逝去と棄隸蹜贊の卽位は通鑑のみ長安三年にかけるが、その他の史料の神龍元年は告哀使が唐朝に到着した事にかけて述べてあるのであるから或は通鑑の記事を正しとするべきかも知れぬ。

棄隸蹜贊 k'ji-liei-tsiuk-tsân はテプゴン及びプトン共にチデツクテン khri lde btsug brtan であるが最後の音が一致したい。ロツクヒルは漢字名よりして khri lde gtsug btsan と還元したが、[27]ラウファーは lde が獵 tie で表される事はあつても隸で表される事はなく棄隸で khri を示すものであるとし、棄隸蹜贊卽ち khri gtsug btsan と見た。[28]しかし思ふに隸は現代音は li であつても唐代には恐らく liei であつたであらうからラウファーの批判は當らない。再び唐蕃會盟碑を見よう。前揭引用文に續き、

後化現せる神贊普チデツクツエン khri lde gtsug brtsan と支那君主三郎開元聖文神武皇帝二者は國家を一つ（の如く）になす事を語らひて、姻戚關係を重ねて、景龍の年に金

城公主を贊普の宮居に迎へ甥舅となりて歡喜せり（E. I. 25—29）

とある。金城公主の降嫁は中宗時代景龍三年十一月に行はれたもので、玄宗とは關係はないが翌唐隆（景雲）元年には宮中に變があつて睿宗が後を嗣ぎ、しかも其の變の總指揮者は玄宗であつたから、誤つて斯く記したものかも知れぬ。事實開元天寶時代を通じて金城公主と玄宗との間には親しい文通の往復が行はれて居た。[29] この史料により棄隸蹜贊は khri lde gtsug brtsan である事誤ない。唐蕃會盟碑によつて決定される事實の第二である。

㈣乞黎蘇籠獵贊は明かに西藏史料に屢々出て來るチソンデツエン khri srong lde btsan であるが最後の「贊」は會盟碑の他の例より見て brtsan とするのを可とする。所で天寶十四載にチソンデツエンが卒しサソンデツエンが後を嗣いだと云ふ支那史料と、チデツクテンが死しチソンデツエンが次いで立つたと云ふテプゴンの記事とは完全に玆で矛盾する。支那史料によればチデツクツエン棄隸蹜贊とチソンデツエン乞黎蘇籠獵贊との關係は明かでなく、又チソンデツエンとサソンデツエン娑悉籠獵贊とは繼いで立つただけで親族關係は何等示されて居ない。又此の後に嗣いだと思はれる王の乞立贊との關係も明瞭でない。その點テプゴンはこの繼承の關係に於て何等の矛盾をも藏さないが如く見え、一見之に從ふのを可とするが如く思はれる。しかし此處での兩史料の不一致は全く別な一史料から解釋されるであらう。

今日唐蕃會盟碑と並ぶ重要な石碑がラサのポタラ宮殿の前に建てられて居る。ワツデルがポタラ碑 Potala Pillar として初めてその鈔寫 eye-copy を紹介し譯註を發表したが、後ベルが更に正確なコツピイを作り、その飜譯のみを紹介したものである。[30] 內容はチソンデツエン khri srong lde b(r)tsan の時に支那に侵入し京師を占領した事を記すもので、正に安祿山の亂に乘じて代宗廣德元年に吐蕃が長安を占領した事實に一致する。所でこの碑にはチソンデツエンを「御子チソンデツエン」btsan po sras khri srong lde btsan と稱し（B.I. 11）、その前代を「父王チデツクツエン」btsan po yab khri lde gtsug rtsan と稱して（B.I. 8）居る。從つて此等兩者は親子關係であり、贊普の位について直接繼承が行はれたのであり、支那侵入は確實に前者の在位中と見做して差支へない。テプゴンが此の兩者の間に直接繼承を認め、チソンデ

ツエンの在位を天寶十四載から建中元年にかけて廣德前後を含めて居るのは全く正しいものと見做さなければならぬ。

テプゴンはプトン其他の西藏古傳承により斯く決定したのであらうが、これは廣德前後の事件が抵觸することなく容れられると云ふ事ではあつても天寶十四載にチソンデツエンが即位したと云ふ證明にはならないと思はれるかも知れぬ。この事についてはやはり支那史料を再度檢討する必要がある。

天寶十四載贊善乞黎蘇籠獵贊死、大臣立其子婆悉籠獵贊爲主、復爲贊普、玄宗遣京兆少尹崔光遠兼御史中丞、持節賫國信冊命、弔祭之、及還而安祿山已竊據洛陽（舊傳上・新傳亦之に殆ど同じくバソンデツエンが「遣使者修好」した爲玄宗は崔を遣はしたとある）

之によつて見るに當時贊普の交代があり、玄宗が崔光遠を遣はした事は事實であり、しかも還ると直に安祿山の亂が起つた事を考へると、玆に混亂の爲チソンデツエンの即位を逝世と誤つたのではないかと思はれる。それにしてもサソンデツエンの在位の有無については現在如何とも決定し難い。

(五)天寶十四載より建中元年までは安史の亂とそれによる塞外諸民族との葛藤により贊普の交代の通知はなかつたらしい。此處に韋倫が大曆十四年から翌建中元年にかけて西藏に使した時面接したのは乞立贊なる贊普であつた。これの比定を決する前に先づ逆に其の後の贊普の系統を明瞭にしておかなければならぬ。

(六)此の時立つた贊普は可黎可足 k'â-lieï-k'â-tsiwok.（ke-li-ke-tsu）であるが明かに唐蕃會盟碑の khri gtsug lde-brtsan（E.l. 1. 1. 15）の khri gtsug を寫したものである。先に陳寅格氏は此の事を注意し、通鑑の所謂彝泰贊普は即ち之なりとして居るが、[31] 既にラウファーも「西藏王統鏡」rgyal rabs gsal bai me long の khri gtsug lde btsan ral pa can を引いて來て khri gtsug は krik-tsuk と發音された爲に可黎可足と寫されたのであらうと鋭い觀察を下して居る。[32] しかしラウファーは此の碑文のE面は見て居ないのであり、W面もワツデル・バッシエル・羅振玉等の不充分なコッピイだけを見て居るに止まつて居る。そのW面に於てはこの王名は磨滅の爲後半しか見る事を得ないのであるから、ラウファーは一方に於て可黎可足は西藏王チデソンツエン khri lde srong btsan に一致すると言ひ、その兩名の音韻の不一致に對しては何等説明を試みて居ないのである。ラウファーはチデソンツエンなる西藏王名を西藏文獻から得たに相違ないが出所を

明示して居ないので困惑せしめられる。

所で通鑑には、

元和十一年二月、西川奏、吐蕃贊普卒、可黎可足立。

とあり、新舊唐書吐蕃傳の記載等より少くとも一年早くチツクデツエンが卽位した事を云つて居るが、との矛盾も唐蕃會盟碑の長慶會盟に關する次の記事によつて解決されるであらう。

化現せる神贊善チツクデツエンの仰せにより……略……支那君主文武孝德皇帝と、甥舅二者たる事につきて、化現者の思ひは一致せり。……の國家は一なり。西藏支那二國は中外の地を守る事につきての大和會をなし、支那國に於ては京師の西方シヤクサンシ ʒag sang si のほとりにて、大西藏の年號は彝泰 skyid rtag 七年、大支那の年號は長慶初年辛丑の年の冬の初月十日に、壇場を設けて支那によりて同盟は認承せられたり。西藏國にてはラサの宮殿の東方ラトヱ園 sbra stod tshal にて大西藏の年號は彝泰八年、大支那の年號は長慶二年壬寅の年の夏の中月六日に、壇場を設けて西藏國によりて認承せられたり。同盟の要領を碑に記せるは是卽ち大西藏の年號は彝泰九年、大支那の年號は長慶三年癸卯の年の……中月十四日に碑に文字を記したり (E.I. 51-67)。

此處に西藏の年號と支那の年號とが三個所對比されて居るが、逆算して見て彝泰元年は元和十年に相當り、チツクデツエンの卽位は正にこの元和十年になるのである。西川節度使は翌十一年二月に之を奏したのであり、舊傳・冊府が共に十二年にかけてあるのはその來告の時期であり、新傳はそれを匆卒にとつて贊普の交代の年月になしたのであらう。

テプゴンにはこの王をカリカチユとして居るが、恐らく支那史料の直譯に相違なく、之がチツクデツエンレーパチエンであることは判斷出來なかつたらしい。テプゴンの第七章における王統にもレーパチエン ral pa gčan の名はあるがチツクデツエンもカリカチユもない。テプゴンの文獻としての不統一な點をそのまゝ表して居る一例である。

(七) 所でチツクデツエンの前代の王は貞元二十年に立つた贊普であるが、漢文史料には王名がなく、テプゴン、プトンは共にチデソンツエン khri lde srong btsan なりとして居る。唐蕃會盟碑には貞元の會盟が画された事を述べたと思はれる所に、

贊普父王神の化現チデソンツエン btsan po yab lha ɑphrul khri lde srong brtsan の仰せにより、ガムキエチンボ sgam dkyel chen po は敎政いづれにも熟達し明けき慈愛深き恩惠もて外内の區別なく八方を掩ふ云々。(E.I. 34-36)

とある。ガムキエチンボは當時吐蕃王廷における一大勢力家であつたらしく、スタイン文書の中にも尙綺心兒 shang khri sum rje 等の名と共に散見する。[34] 尙綺心兒[35]は長慶會盟にも吐蕃の最高幹部として出席して居るから從つて少くともチツクデツエンの時代に直接してチデソンツエンの在位があつたと見て誤りあるまい。唯茲でチデソンツエンを父王 btsan po yab とするのは如何にも直接の父なる如く感じさせるかも知れないが之は寧ろ精神的な意味に取るべきであらう。rgyal po yab が「國家の父なる王」rgyal po yab yum が「國家の父母なる王及びその后」の意なる事が參照になる。尤も btsan po yab についてはチデツクツエン(四參照)の例もあるがチツクデツエンには btsan po sras なる語が修飾せられて居ないのを注意すべきである。プトン等の記載の如くチデソンツエンとチツクデツエンは兄弟關係と見做すのは何等差支へないと思う。支那史料にもこの兩者について親子關係を示した字句を一つも用ひて居ないのは消極的ながら證據となるであらう。

(六)さて以上の如く定めて來ると支那史料によつて次の如き系圖が構成される。

乞立贊
- 足之煎　貞元十三年立
- 某　貞元十四年立
- A チデソンツエン　貞元二十年立
- B チツクデツエン　元和十年立
- C ダルマ　開成三年立

テブゴンには此の邊の系統には親屬關係が何等明示してない故に、より原初的な史料を含むと考へられるプトンを參照すると、「チデツエンに五子あり」と云ひ、整理してみると次の如き系譜が與へられる。

チソンデツエン
- ムネツエンボ mu ne btsan po
- チデツエン khri lde btsan po
  - a チデソンツエン khri lde srong btsan
  - b レーパチエンヅアンマ ral pa can gtsang ma
  - c チダルマウドムツエン khri dar ma u dum btsan
  - ラジエフンドブ lha rje lhun grub
  - チチンボ khri chen po

右の中A＝a、B＝b、C＝c なる事は疑ない。從つて乞

立賛をチデツエン khri lde b(r)tsan と見做すのも可なりと信ずる。[36] 但足立煎と某の二王はラジエフンドプとチチンポに當るかどうかは決定し難い。プトンにはチデソンツエンの前代がチデツエンになつて居るが直には信用出來ない。又テプゴンには同じくチデソンツエンの前にヅツエツエンポ dsu tse btsan po をおいて居るが恐らく「足之煎」tsiwok-t'si-tsien. (北京音 tsu-tsi-tsien) —gtsug khri chen (?)—を漫然と音譯使用したものと思ふ。第七章の王統にはこの王名は完全に抹殺されて居る。

尙ムネツエンポに當るべき王は支那史料には全くない。プトンは之をチデツエンの兄として居るが「一年七ケ月治め、十七才を以て御母に毒を進められ崩ぜられたり」[37] と云つて居る。從つてこのムネツエンポを足立煎に當てる事も一應考へられるが、それによつて配當される支那史料と西藏史料の音韻其の他の不一致はより廣範圍に渉るであらう。又プトンに示された系統に從ふとチソンデツエンとチデツエンの間にムネツエンポがあるからムネツエンポは漢文史料の娑悉籠獵賛ではないかとの疑もある。尤も之もかく一應定めれば世代數の點に於て兩史料の差を無くし得るかも知れないが王名音韻の不一致年代の未決定等は解決し得ない問題として殘る。要するにこの所の王統は決定し難く、西藏王統論に於ける最大の難關をなして居る。以上は一個のより妥當と思はれる試論を掲出したに過ぎない。

(九)チツクデツエンの彝泰賛普なる稱號は通鑑のみの使用せるもので唐蕃會盟碑に會盟當時の吐蕃の年號として skyid rtag が用ひられ、之が漢譯では彝泰となる事は疑ない。新舊唐書吐蕃傳にはこの賛普が「幾三十年」在位した事を云つて居るが逝去の年月を記して居ないので計算する事は出來ない。通鑑のみが開成三年と明示して居るので元和十年より計算すれば二十三年間の在位と云ふ事になるであらう。

嗣いで立つた達磨王はテプゴンにはランダルマ glang dar ma と云つて居るが正しい稱號ではないと思ふ。プトンには前掲(六)の系圖 チダルマウドムウエン khri dar ma u dum btsan とあり、第七章の王統にもチウムツエンダルマ khri um btsan dar ma とある。glang (丑) と云ふのは「丑の如き暴虐者」と云ふ意味の惡稱であるから本來の名稱とは取れない筈である。

所でテプゴンには

丙辰の年（譯者註開成三年）にカリカチユの後を嗣ぎて末弟タム立ちたり、[38]

と云ひ、ついで若干の記述の後に、

己未の年（譯者註開成四年）[39]はランダルマ政治を取りて第四年目の己未なり。

と云つて一致しない記事を出して居る。タムは恐らく達磨 dât-muâ（北京音 ta-mo）の音譯であらうがテプゴンの作者はそれが dar ma と一致する事を理解し得なかつたのであろう。斯くタムとダルマとが同一人であるとすればダルマはやはり開成元年に卽位した事になる。しかし開成元年の卽位とするならばチツタデツエンの在位は二十一年となつて「幾三十年」の句により合はない事となる。恐らくテプゴンのよつた史料が支那史料の三年を元年と見誤つて記載をなしたものと考へられる。後述。参照

四

右の對照を通じて我々は西藏の王統に關して次の表を得るであらう。

永徽元年（庚戌）六五〇……チソンツエン khri srong brtsan（棄宗弄贊）死し孫マンソンマンツエン mang srong mang btsan 立つ。

調露元年（己卯）六七九……マンソンマンツエン死しチドエソン khri ædus srong（器弩悉弄）立つ。

長安三年（癸卯）七〇三……チドエソン死しチデツクツエン khri lde gtsug brtsan（棄隷蹜贊）立つ。

天寶十四載（乙未）七五五……チデツクツエン死しチソンデツエン khri srong lde btsan（乞黎蘇籠獵贊）立つ

大曆十四年（己未）七七九
建中元年（庚申）七八〇 ……チデツエン khri lde b(r)tsan（乞立贊）在位

貞元十三年（丁丑）七九七……チデツエン死し其の子足之煎立つ。

貞元十四年（戊寅）七九八……足之煎死し其の弟某立つ。

貞元二十年（甲申）八〇四……某死し其の弟チデソンツエン khri lde srong brtsan 立つ。

元和十年（乙未）八一五……チデソンツエン死しチツクデツエン khri gtsug lde brtsan（可黎可足）立つ

開成三年（戊年）八三八……チツクデツエン死しダルマ dar ma（達磨）立つ。

會昌二年（壬戌）八四三……ダルマ死し國中混亂す。

さて以上の對照考察を通じて人は兩史料の間に案外背致するものが少く特に年代についてはかなり西藏史料も正確であるとの印象を受けるかも知れぬ。しかし兩者の一致は實は當然なので、テプゴンのこの年代を記した第十章には冒頭に次の句があるのである。

ソンツエンよりダルマまでは支那の記錄等に述べられたるものをラマリンチンダクパが西藏語に飜譯しクンガードルヂエ王が文字に記したものによりて書き記すなり。[40]

右の文によりテプゴンの年代の正確さと云ふのは實は系統的には全く支那史料より出たもので、年代に關する限り何等西藏の原史料から出發したものではない事が明かになつた。二三の年代について支那史料が誤つて居るにもかゝはらず、西藏史料がその誤と同一の年代を取つて居るのも當然であり、支那史料から逆に無批判に取り入れたと思はれる奇怪な王名があるのも無理はない。古代史の年代計算を基礎とするものであるならばそれはそれのみで意味を持つて居るかも知れない。しかし古代史料としてのテプゴンの價値は之を以て著しく劣る事になる。少くとも年代計算が正確であるからと云ふ理由で古代史料として評價する事は不可能となる。然らば第七章の王統は如何と云ふ事になるが、天王七代、中王二代、地王六代、デ王七代より更に九代を經てソンツエンガンポに至る王統は一見頗る整然たるものである。所がその中、コンテンポラリイと考へられる支那史料、會盟碑、スタイン文書等と完全に一致する王名等は一つもない。ソンツエン以後の王統にせよ、既に述べた同一書内の記述とも一致せず、されば云つてプトンと比較してもプトンの方が史料的にはよりウルな感じを與へる。結局テプゴンに於て年代の正確さ、内容の豊富さにその價値を認めようとすれば、それは後期弘通以後の部分であつて、前期弘通卽ち古典古代の部分にあるのではない事になる。茲で或は人はスンバケンボの學識を謳ひパクサムジョンサンを提出するかも知れない。しかしパクサムは王統年代に關してはプトン・テプゴンを無批判に受容して、より事實に遠い歷史を構成して居る。しかも何等有益な傳承なり事實なりを示す事もない。

茲に至つて古代西藏史研究に關する方法は明かであらう。卽ち支那史料と會盟碑、敦煌文書等の間で事實決定を行ひ、西藏史料はそれを基準として整理されるべきである。結局西

藏史料は史料としての價値の位置は低く、支那史料がより原初的な根本史料とされなければならない。

この結論は西藏史料が一見頗る無價値なものと決定されるが如く取られるかも知れぬ。しかし一方支那史料の記述と云ふものにも大きな限界のある事は塞外史一般の常識である。例へば西藏佛教の問題にせよ唐代支那文献にある記述は寥々たるもので到底その現實を具體的には知る事は出來ない。敦煌文書出でてより、より詳細に寺院とか僧侶とかの存在を知る事は得たが、尙之は斷片的なものであつて、系統的な材料とする事は不可能である。我々は此の點やはり西藏史料を活用せざるを得ないのである。プトンにおける年代の不明確さも佛教流傳の事實までも否定することは出來ない筈である。我々にはやはり複雜ではあるが諸史料との對比を愼重に行ひながら西藏史料を巧に利用せないわけにはゆかない。そしてそれによつてのみ古代西藏の文化の方面は、より詳細に、より明確に把握する事が出來るのではないかと思はれるのである。

〔完〕

〔註〕

㉔ dei tshe bod ɑbangs kyis rgyal po la gçe ba gsan nas dge ba boui khrims bcas te bod rnams chos la bkod pas ming srong btsan sgam por grags so/

㉕青木先生は云ふ。「ソンツェンガンポとは『直進、嚴正、深慮者』の義で、直進とは正直にして勇氣ある事、嚴正とは仁義、深慮とは叡智あるの謂なれば必竟智仁勇兼備の明君たる事を示した語である（「西藏文化の新研究」一二〇頁）。尙シトウケンポ si tu mkhan po の「三十偈性入法註釋」byakaranamūla sum cu pa dang rtags kyi ɑjug pa shes bya ba にはソンツェン王について次の如く述べて居るが、西藏の學者に考へられて居る代表的觀念と見てよいであらう。このテキストはダス編纂の活字本もあるが、（S. Ch. Das, An Introduction to the Grammar of the Tibetan Language with the Texts of Situi Sum-rtags, Dag-je Sal-wai Me long and Situi Shal-lung)。青木先生所藏のラサ版の一種によつた。

大王卽ち人の神にてもあり、荒ぶる人々從はしめ難き者共を二種（譯者註、法と世間法）の街きならはしの道に「直く進ましめ」srong 親しきもの、親しからざるもの又はその半ばなるもの等に等しく平靜なる慈みの心を與ふる爲に、雜りなき勅命を「强き力もて」sgan po 諸々の臣下を支配する事を多くなし、內外道の行の所依一切を混同し紛亂する事なく、三種の觀察もて辨別し、博識なりと稱へられる者によりても思慮の深さ量り知れず、故に「深きもの」sgam po 卽ちソンツェンガンポ srong btsan sgam po なる佳き聞えの名をもて讃へらるゝもの、衆生の吉祥として現れ出でたり（2b）

rgyal po chen po mii lhaam yang na skye bo mi srun pa gdul dka ba rnams lugs gnyis kyi srol bzang poi lam du nan gyis srong shing/ mdsa ba dang mi mdsa ba dang bar ma rnams la thugs rab tu snyoms pas phyogs sum lhung bai phyir çin tu drang bai bka khrims btsan poi gnas las mna og ba rnams ada bai skabs mang ba dang/ phyi dang nang gi bya bai gnas thams cad ma achol shing akhrugs pa med par dpyad pa gsum gyis gtan la abebs çing mdsangs par grags pa rnams kyis kyang dgongs pai gting dpog pa med pai phyir sgam po ste srong btsan sgam po shes mtshan snyan par grags pa nyid skye dgui dpal du çar to/

㉖ Laufer, Bird Devination among the Tibetans. T'oung Pao. 1914. p. 29.

㉗ Rockhill, The Life of Buddha. 1884. p. 217.

㉘ Laufer, ibid.

㉙「賜金城公主書」（全唐文卷四〇）「謝恩賜錦帛器物表」「乞許賛普請利表」「請置府表」（同卷一〇〇）

㉚ Waddell, Ancient historical Edicts at Lhasa. JRAS. 1910. p. 1248. Charles Bell, Tibet past and present. Appendix II.（田中一呂譯「西藏過去と現在」附錄二）

㉛田中氏譯には「京畿」として居るがワッデルのコッピイには keń çi とある（Waddell, ibid. p. 1278. l. 54. 56.）ので「京師」の音譯と見做す。唐蕃會盟碑には keń çe と出て來る。（E. l. 57）

㉜陳寅恪「吐蕃贊普名號年代考」（蒙古源流研究之一）國立中央研究院歷史語言研究所集刊第二本。

尙陳氏はこの中で（五頁）、北平圖書館所藏敦煌本八波羅夷經にはその當日の吐蕃の贊普の詔書を附載し、中に、

令諸州坐禪人爲當今神聖贊普乞里提足贊聖壽延長祈禱。

とあると云ふ。陳氏は此の贊普名について「提足二字當是傳寫誤倒」と云ひ、之を khri gtsug lde brtsan 卽ち可黎可足贊普の音譯名と見て居るが、王の長壽祈禱をなすのに其王の名を誤る等と云ふ事は常識としては餘り考へられない。此はそのまゝ khri lde gtsug brtsan 卽ち棄隸蹜贊と見て差支へないのではなからうか。

㉝ Laufer, Bird Devination. TP. 1914. p. 91.

㉞ Thomas, Tibetan Documents concerning Chinese Turkestan. II. JRAS. 1928. p. 81.

㉟唐蕃會盟碑 N. l. 4.

㊱立 liəp を以て lde に當てはめるのは一見音韻的には無理なやうであるが識 liei・獵 liäp・臘 lâp 等の字に lde が當てられて居る（㊂㊃參照）のと同一と見做し得るであらう。勿論 liəp の -p は b(r)sran の b- を表はしたものである。

㊲ [mu ne btsan po] chab srid lo gcig dang zla ba bdun mdsad de bcu bdun pa la yum gyis dug btang ste adas so/

㊳ me pho abrug la bod kyi rgyal po adas/ lo de nyid〔二字不明〕cung bo tha chungs tha mu shes ba rgyal sar bskos/

㊴ sa mo lug adi glang dar mas rgyal srid byas nas lo bshi lon pai sa mo lug de yin no/

㊵ srong btsan nas dar mai bar du rgyai yig tshang la sogs par btab pa bla ma rin chen grags pas bod skad du bsgyur te byung ba/ mii bdag po kun dga rdo rjes yi ger btab pa bshin bri bar bya ste/

AN EXAMINATION OF TIBETAN WRITINGS AS HISTORICAL SOURCES

By Hisashi Sato

Bu-ston's Chos-ḥbyuṅ (History of Buddhism), Deb-gter sṅon-po, the fifth Dalai Lama's Chos-ḥbyuṅ Dpag bsam ljon-bzan, and Tāranātha's Chos-ḥbyuṅ and Horchos-ḥbyuṅ are usually regarded as the most important historical date of the ancient Tibetan dynasties, which were called T'u-fan by the Chinese. However, except the first two they are of little value as historical materials, because they are nothing but compilations of older documents. Bu-ston's Chos-ḥbyuṅ and Deb-geter sṅon-po are very important records. From the standpoint of the history of Buddhism Bu-ston's writings are extremely valuable, and among his works the Ded-sṅon is considered to contain accurate chronological data. Of what nature is the Deb-sṅon's chronology? To what extent are the data contained in it reliable?

The first volume of the Deb-sṅon consists of eleven chapters. Chapters II–V are compilations of the traditions taken out of the Hindu sūtras, while Chapter VI is a compilation of the Tibetan traditions. Historical events are described only in Chapters VII, VIII and X, but they are noting but an uncritical collection of some Chinese and Tibetan materials. After close examination it comes out that the chronology of the Deb-sṅon is reliable only so far as it depends on the Chinese materials.

With regard to the chronology of the Tibetan dynasties there are discrepancies between the Chinese records and the Tibetan documents.

In the light of the author's research the contemporaneous Chinese records, the Lhasa Treaty Edict Inscription and the Tun-huang documents are to be taken as the most reliable source materials, while the Tibetan documents are much inferior because of its nature as mere compilations of the traditions.